慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 漢籍外典古写本研究資料 : 斯道文庫所蔵本について |
| Sub Title | A bibliographical introduction of old manuscripts of Chinese books in the collection of Shido Bunko |
| Author | 高橋, 智(Takahashi, Satoshi) |
| Publisher | 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 |
| Publication year | 2016 |
| Jtitle | 斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.51 (2016. ) ,p.1- 32 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 挿図 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20160000-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 漢籍外典古写本研究資料

## ―斯道文庫所蔵本について―

髙橋　智

〔目次〕

はじめに
斯道文庫所蔵漢籍古写本目録（除『論語』・『孟子』類）
既刊解題未収本について

## はじめに

漢籍外典の、室町時代以前に書写された写本は、数少ない奈良・平安時代のものは別として、現所在のものを書写年代で大きく分けると、鎌倉時代・南北朝時代・室町時代の書写本に類別できる。それらを更に、経部・史部・子部・

集部の内容とその現存本の書写時代を照合していくと、我が国の、中世の、各時代に於ける漢籍受容の傾向が一目できるということが言えよう。更にその書写者の出自を見ていくときには、博士家系・足利学校系・寺院系等に分別されることが分かっているが、これらの要素を縦横に検討していくことによって、現存漢籍外典古写本の意義が明らかになっていくものと思われる。このような意味から、古写本の時代や出自の特徴を備えた典型を集めて一堂に会する試みがやがては必要となるであろう。具体的には、以下の書名に就いてのものが主な対象として挙げられる。

経部、『周易』王弼注、『周易』孔穎達正義、『尚書』孔安国伝、『尚書』孔穎達正義、『毛詩』鄭玄箋、『毛詩』孔穎達正義、『周礼』鄭玄注、『周礼』・『儀礼』賈公彦疏、『礼記』鄭玄注、『礼記』孔穎達正義、『春秋経伝集解』、『春秋』孔穎達正義、『古文孝経』、『御注孝経』、『大学章句』、『中庸章句』、『論語』何晏集解、『論語』皇侃義疏、『論語』朱熹集注、『孟子』趙岐注、『孟子』孫奭正義、『孟子』朱熹集注、『千字文』、『韻鏡』、史部、『史記』、『貞観政要』、子部、『孔子家語』、『帝範』、『臣軌』、『七書』、『斉民要術』、『五行大義』、『群書治要』、『蒙求』、『遊仙窟』、『老子道徳経』、『南華真経』、集部、『李嶠百二十詠』、『白氏文集』、『長恨歌・琵琶行』、『東坡先生詩』、『山谷詩集注』、『胡曾詠史詩』、『文選集注』、『文館詞林』、『三体家法詩』、『聯珠詩格』、『古文真宝』。

これらのものについて古写本を選び匯萃することによって、『漢籍古写本匯萃』という一つの叢書が完成することも考えられる。

さて、その、漢籍外典古写本の研究は、慶應義塾大学斯道文庫が創設された昭和三十五年以来の研究テーマで、昭和三十六年には、「日本現存漢籍古写本の綜合的研究」の研究事業項目をたて、全国の所蔵機関の原本についてのマイクロフィルムによる複本作製と、更に市場に流通する原本の購入が始められた。こうして、昭和三十七年からは、『論

語』古鈔本類を中心に本格的な蒐集が開始された。そしてその頃、阿部隆一による『本邦現存漢籍古写本類所在略目録』未定稿が編纂された。これは後に、『阿部隆一遺稿集』第一巻（汲古書院　平成五年）に『宋元版所在目録』（未定稿）とともに収載された。我が国の中世期、特に室町時代を中心とする漢籍研究は、大陸渡来の宋元版とその版本への書き入れの調査、カナ抄等の注釈書類の調査、それに、古来のテキストと宋元版を校訂して成書した古写本の調査を基礎とするが、一千点を超える古写本の整理は、困難を窮める。個々の伝本の、詳細な原本による書誌調査と各書の所在伝本の相互関係や校勘作業による源流調査の両面が求められるからである。それらの出自は、総じて、前述の如く、博士家系統、足利学校系統、寺院系統等の流れに分けられるが、その系統を定めていくのもまた簡単なことではない。

こうした研究事業の成果として、阿部隆一「本邦中世に於ける大学中庸の講読伝流について」（『斯道文庫論集』第一輯）「古文孝經舊鈔本の研究」（同第六輯）等に倣って、筆者も「趙注孟子校記」（同二十四・二十六輯）「室町時代鈔本論語集解の研究」（同四十輯）等を作製し、最も伝存の多い『論語』の室町時代古鈔本については、『室町時代古鈔本論語集解の研究』（汲古書院　平成二十年）にその伝本の意義をまとめた。

また、斯道文庫創立十周年の時に展観（昭和四十五年十二月一日～四日）された古写本類には、簡略ではあるが、極めて充実した解題が記された。『斯道文庫創立十周年記念近蒐善本展観書目録』がこれである。その後、平成七・八年の頃に行われた斯道文庫に所蔵される貴重書の解題目録編纂の折、幾つかの古写本についての解題が作製され、『斯道文庫貴重書蒐選』（平成九年二月）に収載された。爾来、市場に於ける古書奔流の時代も以前のような勢いはなく、原本購入も限られてきたが、少ないながらも増架を続けている。そこで、現在、斯道文庫が蒐集した漢籍古鈔本の、『論語』『孟子』類（これらについては前掲拙著を参照）を除いたものの目録は、以下の如くであるが、右記の二

種類の目録に未収のものについて、ここに簡略な解説を加えて、研究の便に期したいと考える。

## 斯道文庫所蔵漢籍外典古写本目録（除『論語』・『孟子』類）

＋斯道文庫創立十周年記念近蒐善本展観書目録（昭和四十五年十二月）所載
＊斯道文庫貴重書蒐選（平成九年二月）所載

＋周易六巻　魏王弼注　慶長十四年（一六〇九）写　一冊（091ト58）
周易〔十〕巻　存巻三・四　魏王弼撰〔室町後期〕写「冷泉府書」印　大一冊（091ト210）
周易〔十〕巻　存巻七・八　晋韓康伯注　天正九年（一五八一）写　大一冊（091ト221）
周易注疏〔十三〕巻　存巻一　附五経正義表　唐孔穎達等撰（附）魏王弼撰〔室町後期〕写　大一冊（091ト223）
＋易学啓蒙〔通釈〕　宋胡方平撰〔室町〕写　一冊（091ト59）
＋毛詩正義序　明応六年（一四九七）写　一冊（092ト10）
＋礼記二十巻（単経鄭注本）〔室町初〕写　八冊（092ト11）
＋春秋経伝集解三十巻　晋杜預撰〔室町末〕写　八冊（091ト62）
＋古文孝経　旧題漢孔安国伝　永正十一年（一五一四）写　一冊（091ト63）
＋古文孝経　旧題漢孔安国伝　大永三年（一五二三）写　一冊（091ト70）

＋古文孝経　旧題漢孔安国伝〔鎌倉〕写　一巻（092ト12）
＋古文孝経　旧題漢孔安国伝　文安二年（一四四五）写　安田文庫旧蔵　一冊（092ト14）
＋孝経直解三巻　旧題漢孔安国伝（序）隋劉炫注（附）宋邢昺正義抄録　日本闕名編〔室町末〕写　一冊（091ト15）
孝経直解三巻　旧題漢孔安国伝（序）隋劉炫注（附）宋邢昺正義抄録　日本闕名編〔室町〕写　一冊（091ト158）
孝経直解三巻　旧題漢孔安国伝（序）隋劉炫注（附）宋邢昺正義抄録　日本闕名編〔室町〕写　一冊（091ト159）
＋孝経直解三巻　旧題漢孔安国伝（序）隋劉炫注（附）宋邢昺正義抄録　日本闕名編〔室町末〕写　一冊（092ト17）
＋＊史記　存巻五秦本紀　漢司馬遷撰　劉宋裴駰集解〔平安末〕写　一冊（092ト54）
＋＊貞観政要十巻　存巻四・五・六・九　唐呉兢撰〔鎌倉〕写（巻九〔室町〕写）菅家本　四冊（092ト56）
＋＊貞観政要　存巻一・二・八・十　唐呉兢撰〔室町〕写　四冊（092ト57）
＋＊黄石公三略三巻　天正二十一（文禄二）年（一五九三）写　一冊（091ト80）
黄石公三略三巻　文録四年（一五九五）写　一冊（091ト149）
＋＊六韜六巻〔室町〕写　一冊（091ト83）
＋六韜　存巻四―六　天文五年（一五三六）写　一冊（091ト84）
六韜六巻〔近世初〕写　三冊（091ト152）
六韜六巻　存巻四―六〔室町〕写　大一冊（091ト280）
標題徐状元補注蒙求三巻　唐李瀚撰　宋徐子光補注〔近世初〕写　天正二十年（一五九二）奥書　大三冊（091ト307）
＋遊仙窟　唐張鷟（文成）撰　闕名者注〔江戸初期〕写　一冊（091ト86）

＋＊老子道徳経二巻　旧題漢河上公章句　〔南北朝〕写　康応二年（一三九〇）施入識語　二冊（091ト88）
＋＊老子道徳経二巻　旧題漢河上公章句　天文十五年（一五四六）写　伊藤有不為斎　残花書屋旧蔵　二冊（092ト59）
荘子序文　〔室町〕写　大一冊（091ト224）
南華真経注疏解経〔三十三〕巻　存内篇巻一～五　晋郭象注　唐成玄英疏　〔室町〕写　大二冊（091ト225）
＋＊〔施氏七書講義〕存巻八零巻（孫子地形篇）金施子美撰　〔鎌倉〕写　金沢文庫旧蔵　一巻（092ト22）
＋寒山詩　唐釈寒山撰　文明十五年（一四八三）写　一冊（091ト92）
＋長恨歌伝・長恨歌　唐陳鴻撰　唐白居易撰　〔室町〕写　一巻（092ト62）
＋＊百二十詠　零巻　唐李嶠撰　〔鎌倉末南北朝〕写　一巻（092ト70）
＊百二十詠　零巻　唐李嶠撰　〔南北朝〕写　一巻（092ト73）
新刊全相二十四孝詩選　附二十四孝詩・二十四孝伝・二十四孝之記・二十四孝　元郭居敬撰
〔室町〕写　半一冊（091ト170）
唐賢三体家法三巻　存巻三（五言）宋周弼撰　享禄二年（一五二九）写　宝幢寺旧蔵　大一冊（B1ト98）

## 附録〔江戸〕写等

〔蒙求〕存後半（有欠）唐李瀚撰並注　〔安政六年（一八五九）〕写（海保漁村）真福寺蔵古写本の影写　一冊（B一ト43）
遊仙窟　唐張鷟（文成）撰　闕名者注　〔江戸〕写　今出川家旧蔵　一冊（091ト120）

＋＊文館詞林　存巻六六八　唐許敬宗等奉勅編〔明治〕写　一冊（091ト3）

＋＊同　存巻一五八・五〇七・六六二・六六四・六六八残、三四八奥書、六九五〔江戸後期〕摹写　一巻（092ト71）

## 既刊解題未収本について

周易〔十〕巻　存巻三・四　魏王弼撰〔室町後期〕写「冷泉府書」印　大一冊（091ト210）

栗皮表紙、縦二十四・四糎、横十八・八糎。巻第三即ち「上経」の「噬嗑」から「離」までの十卦、巻第四即ち「下経」の「咸」から「益」までの十二卦のみを存す。「周易上経噬嗑伝第三（隔四格）王弼注」「周易下経咸伝第四（隔五格）王弼注」と題す。尾題は、それぞれ「周易上経第三（隔二格）経一千九百七十五字／注四千六百九十四字〈経注字数は小字双行〉」「周易巻第四（隔三格）経二千五百七十六字／注五千五百六十六字〈経注字数は小字双行〉」。書式は、薄墨の墨界を半葉九行に整え、各行に十七字で記す。注文は小字双行。界内の大きさは、縦十九・〇糎横十五・三糎。一行の幅は一・八糎。柱部分には何も記さない。料紙は楮紙で、巻第三は墨付き十五葉、巻第四が十九葉。本文・注文総て一筆で書写され、同筆で返点・送仮名書き入れている。巻第三の首にだけ朱点がある。巻第三の首に「冷泉府書」（長方単郭陽刻）の印記がある。

周易〔十〕巻　存巻七・八　晋韓康伯注　天正九年（一五八一）写　大一冊（091ト221）

本文共紙の原表紙に焦げ茶色の刷毛目表紙を加える。原表紙には「周易繫辞伝巻之七／八」と墨書する。縦二十六・〇横二〇・〇糎。巻第七「繫辞伝上」と巻第八「繫辞伝下」を存する。本文巻頭は、それぞれ「周易繫辞上第七／（低

十一格）韓康伯注」「周易繫辞下巻第八／（低十一格）韓康伯註」と題し、尾題は、それぞれ「周易巻第七（隔一格）経二千三百五十七字／注二千五百九十七字〈経注字数は小字双行〉」「周易巻第八終経二千一百四十字／注二千四百三十三字〈経注字数は小字双行〉」。書式は、毎半葉九行の墨界（縦二十・三横十五・六糎）と上層に三・三糎の欄を設け、毎行十六字、小字双行で書写している。柱部分には何も記さない。料紙は楮紙で、墨付き各巻十四葉・十三葉。本文・注・書き入れ・上欄注、総て同一人の手によって書写されている。本文・注総てに亘って訓点（返点・送仮名・縦点・附訓）を施し、朱筆による句点・合点も加えられている。巻第八末葉裏に、「于時　天正九年辛巳（この二字小字双行）衣更著上旬書之」と、本文と同筆の書写奥書がある。その下に「河□」（長方双郭陽刻）の印記がある。即ち本書は、天正九年（一五八一）の書写本である。

周易注疏〔十三〕巻　存巻一　附五経正義表　唐孔穎達等撰　（附）魏王弼撰　〔室町後期〕写　大一冊（091ト223）

唐・孔穎達（五七四～六四八）の『五経正義』が成立して以後、『周易』の注釈書である『周易正義』は、正義（疏）文のみを刻し、十四巻本として行われた。その後、南宋時代の前期（十二世紀末）に魏・晋の古注と併せ刻して所謂注疏本が現れた時、今度は『周易注疏』と題し、十三巻本として行われるようになった。その後、更に元代に至ると、『周易兼義』の名で行われるようになり、九巻本となった。そして、明・清時代の民間に於ける流布本は皆これに倣うようになった。日本に於ける受容は、おそらく、鎌倉時代以前の古い時代に、宋刊本『周易正義』（或いはそれよりも古い写本）が渡来し、それをもとに写したと思われる書写本が、幾つも現存していることから、『正義』の受容の程が伺える。ところが、注疏本の渡来も金澤文庫蒐集本に見えるように古いが、かえってその注疏本をもとに書写した

ものは伝存が稀で、国立公文書館内閣文庫（十三冊　別四十六・三）と台北故宮博物院楊守敬観海堂本（六冊　足利学校所蔵の宋刊本を伝鈔したもの）の現存が知られるのみである。そして、本書はその系統に属するもので、おそらくはもと十三巻であったものの残巻と考えられ、こうした背景から鑑みるに貴重な現存本と言える。

原表紙は欠落し、新補の藍色表紙が付けられている。縦二十六・二横十九・九糎。永徽四年（六五三）長孫無忌の「五経正義表」二葉を附す。その後に孔穎達の「周易正義序」八葉を冠す。「周易正義序／（低二格）国子（隔一格）祭酒（隔一格）上護軍（隔一格）曲阜県（隔一格）開国子／（低二格）臣（隔一格）孔穎達（隔一格）奉（隔一格）勅撰定」と題し、「周易注疏序終」と尾題を加える。本文巻頭は、「周易注疏巻第一／（低二格）国子祭酒上護軍曲阜県開国子臣孔穎達／（低二格）奉（隔一格）勅撰」と題し、尾題は「周易疏巻」と題す。「経」は大字で、魏・王弼の注は「注云」として小字双行、孔穎達の正義は、「疏」と大字で標目し、「正義曰」として小字双行で記す。毎半葉八行毎行十九字で書写され、字面の高さは約二十糎。柱の部分には何も記さない。本文上部の空白に書写者による補注を加える。本冊に関しては総て一筆で書写されている。本文への書き入れも本文と同筆で、返点・送仮名・縦点・附訓が墨筆で加えられ、朱筆の合点・句点・傍点・朱引きもまた同じ手ではないかと思われる。料紙は楮紙で、墨付き五十二葉。尾題後に「紿□」丸型単郭陽刻印がある。

孝経直解三巻　旧題漢孔安国伝（序）隋劉炫注（附）宋邢昺正義抄録　日本闕名編〔室町〕写　一冊（091ト158）

この『孝経直解』は、小雲石海涯の『新刊全相成斎孝経直解』（元刊本・民国二十七年来薫閣書店影印）とは全く違うもので、講学の為に中世の日本人が編纂したテキストである。書写の形式等から、足利学校に関連するテキスト

であろうと想像される。巻二・三とは題さないが、孔安国の序を巻第一とし、『古文孝経』の全文（経伝）を一段とし、また、邢昺（九三二～一〇〇三）の『孝経正義』の肝要な部分を抜抄したものを一段としていることから、この三部分を総合して三巻本とするのが通例となっている。その現存する古写本は二十点に垂んとするほどで、その当時の流行を窺い知れる。本書に関する研究は、阿部隆一「古文孝經舊鈔本の研究」（『斯道文庫論集』第六輯　昭和四十二年）「室町時代邦人撰述孝経注釈書考」（『大倉山論集』第八輯　大倉精神文化研究所　昭和三十五年、また、『阿部隆一遺稿集』第二巻　汲古書院　昭和六十年）、林秀一「孝経直解を繞る問題」（『孝經学論集』明治書院　昭和五十一年）を参照。元来、本書は、足利学校所蔵本が著名であったために、山井崑崙（鼎・一六八〇～一七二八）『七経孟子考文』に紹介され、大陸で長く失われていた佚書を含むことが明かされ、更にその佚書は、朝川善庵（鼎・一七八一～一八四九）の『古文孝経私記』に於いて、『隋書経籍志』に著録される隋劉炫撰『孝経述議』であることが論じられた。孔安国の序に施された注こそが、その『述議』なのであった。そして、後にその『孝経述議』原本の古写本が清原家の庫中に発見され（現在、京都大学附属図書館清家文庫所蔵）、林博士の研究により、『直解』と『述議』の関係も整然と整理、明かされることとなったのである。

本書は、縦長の書型で、後補の栗皮表紙、縦二十八・三横十七・五糎。内扉の左上に「孝経」と墨書する。副葉子一枚に、左の如き文をもって、「十三経」から「古文」の説明まで、『孝経』に関する説明をメモ書きしている（本文同筆）。こうした説は室町時代に足利学校を中心として行われていたものと思われる。

「十三経周易毛詩左伝礼記尚書論語孝経老子経／公羊伝穀梁伝列子荘子周礼／漢通誦論語孝経非先王書是孔子所伝説故謂之／伝又尚書正義凡非聖則謂之伝／伝之端者毛詩序正義曰伝者通其義古文尚書正義曰／科斗書古文也所謂黄帝

之臣蒼頡本始作焉周所／用之今所不識是古人所為故名古文形多頭鹿尾／細胶状団円似水虫科斗書新住科斗虫名蝦蟆子／矣書形似之吾録曰子国考論古文字撰衆師之義／為古文論語二十一篇孝経二篇尚書伝五十八篇皆／所出壁中科斗本書也然則孝経為二巻不知誰并／或本解字下有要字此書簡要義也」この後にも小字のメモが続く）

巻頭は、「孝経直解巻第一」と題し、孔安国序の全文と注釈を収める。ここに双行で割載された注文が、佚書である隋劉炫撰『孝経述議』と一致するということである。この序が十葉あり、その後に『孝経』の本文が続く。「古文孝経（隔十一格）孔氏伝／開宗明義章第一／仲尼間居曾子侍坐」と始まり、以下小字で孔安国の伝を記す。全部で二十葉。末に「古文孝経終　経一千八百五十字／注八千七百六十四字（経注字数は小字双行）」と尾題を記し、続いて、邢昺（九三二～一〇〇三）『孝経正義』を参考にして、「五等」「語録曰」「述議曰」「名有五品」など数十項目の語釈などを列挙している。これが三葉。どのような意図で抽出編纂されたかははっきりしないが、編纂者が肝要と認めた項目が、写し学ぶ者の金科玉条となって、テキスト化されたものである。その末に「孝経正義」と尾題を記す。この部分の抽出は、孔安国の序の後、本文の前に置かれる写本が多いが、本書は最後に附している。

薄葉に足利学校の書式である上欄を配した墨界を施す。本文の内匡郭は縦十九・七横十四・七糎で、上層は五・〇糎。毎半葉九行、行二十字小字双行、全巻一筆で、返点・送仮名・縦点・附訓も同筆で加える。朱引き、朱の合点・句点、また訓点もまま見られる。本文内の傍注も多く、その大部分は語釈である。上層には、邢昺『正義』、鄭玄（一二七～二〇〇）『注』、『論語』皇侃（四八八～五四五）『疏』、『礼記』等が引かれる。

また、足利学校写本に見られる朱の記号も見られ、『孝経直解』なるテキストが足利学校での講説を中心としていることがはっきりと伺える。印記等は見られない。室町時代後期から末期にかけての写本である。昭和四十九年購入。

孝経直解三巻　旧題漢孔安国伝（序）隋劉炫注（附）宋邢昺正義抄録　日本闕名編〔室町〕写　一冊（091ト159）

本書も前書（091ト158）と全く同系列の写本である。四針眼訂で後補の香色表紙（縦二十六・五横一八・六糎）に題簽を貼り、「古文孝経　全」と墨書する。副葉子の見返しに前書と同じようにメモ書きがあるが、こちらは、『盂蘭盆経』『涅槃経』等を引き、釈家の手を経たものであることがわかる。しかし、これは本文やその書き入れ等とは別筆のようであり、この手もまた本文の上層などに書き入れていることから、本文と同筆の書き入れと二手による書写本であることがわかる。前書と同様に、「孝経直解巻第一」と題し、孔安国の序と隋劉炫の注があり（十葉半）、引き続き『正義』を参考にした語釈注（三・五葉）がある。本文は改丁してそれに続き、「古文孝経（隔十三格）孔氏伝／開宗明義章第一」となって、前書と同様に始まる。尾題も同じ。本文は二十葉。書式は、これも足利学校の様式で、薄葉に単線の墨界を施し、毎半葉九行、毎行二十字、小字双行、内匡郭は縦十八・八横十四・九糎。上層は五糎。全巻に亘り、本文は一筆、それと同筆の上層書き入れ、返点・送仮名・縦点・附訓が加えられる。それともう一筆（副葉子見返しの手、やや後手か）の書き入れがある。この二手はそう時期を隔てたものではなさそうである。朱の句点や合点、朱引き、記号等はその後手によるものであろう。書き入れの引用は『正義』を中心とし、この類の写本に共通したものが多い。もとになるテキストから、如何に多くの写本が繰り返し写されたかは、想像に難くない。室町後期から末期にかけての書写であろう。本書も由来を示す印記・識語等は見られない。昭和四十八年購入。

黄石公三略三巻　文録四年（一五九五）写　　一冊（091ト149）

『三略』の成立とテキストの流通については、阿部隆一「三略源流考附三略校勘記・擬定黄石公記佚文集」（『斯道文庫論集』第八輯　昭和四十五年）に述べられている。そこに「四　現存三略旧鈔本」として解説されているのが十五本、即ち知恩院・大和文華館（近鉄）・静嘉堂文庫・台北故宮博物院（楊氏観海堂）・斯道文庫（天正十一年）・高知県立図書館・東洋文庫・築島裕・慶應義塾図書館・東京大学国語研究室（天正九年）・大東急記念文庫・斯道文庫（慶長十六年）・竹本氏穂久迩文庫・慶應義塾図書館（慶長頃）・東京大学国語研究室の所蔵本についてである。現在では、他にお茶の水図書館成簣堂文庫・尊経閣文庫等にも確認されている。これらの所蔵に加えられる一本である。室町時代の古写本について見るとき、兵書の現存は、その数で、『易』類、『孝経』類、『論語』『孟子』等の『四書』類に拮抗していることは中世の漢籍受容の大きな特徴である。

本文共紙の表紙・本文紙ともに総裏打ちを施している。縦二十五・〇横一七・六糎の香色表紙の背を後補紙で包むように補強している。表紙の左上に「黄石公三略」と墨書するが、本文と同筆に見える。「黄石公三略／上略／夫主将之法・・・」と本文が始まる。十五葉に鈔写し、「黄石公三略下終」と尾題を書す。毎半葉七行の墨界に毎行二十字で書す。内匡郭縦二十一・一横十二・六糎。界の幅は一・七糎。全葉一手で返点・送仮名・縦点・附訓も墨書で本文と同筆。朱点・朱引きも同筆であろう。本文尾題の後に「于時文録四乙未（この二字双行）年霜月拾一日　下野国宇都宮市場筆者閑江斎」と本文同筆により墨書す。『弘文荘待賈書目』（第十号　昭和十二年十月）に所載。昭和四十六年購入。

六韜六巻　〔近世初〕写　三冊（091ト152）

『六韜』古写本も『三略』同様、十数部の現存があり、後に『七書』の出版を見て流行する以前の隆盛を察することができる。本文共紙表紙縦二十八・五横二十一・五糎。新補の紙で背をくるむ。「六韜巻第一／（低二格）文韜／（低二格）文師／文王将田史編・・・」と本文が始まる。巻一末を欠く。尾題は「六韜巻第二」の如く記す。各冊二巻を配す。無界に書し、毎半葉七行毎行十四字。大振りの書写である。字面高さ約二十三糎。返点・送仮名・縦点・附訓を加える。朱句点・朱引きあり。全巻書き入れも含めて総て一筆。料紙は楮紙で、各冊墨付き二十四・四十二・二十五葉。伝来を示す印記等はない。昭和五十四年購入。

六韜六巻　存巻四―六　〔室町〕写　大一冊（091ト280）

濃藍色の古表紙（縦二十六・三横二十・五糎）に朱地の題簽を貼り「六韜　四之六」と墨書する。室町時代後期から末期にかけて、博士家系統の写本に見る様式の表紙造りである。巻一～三を欠く。「六韜巻第四／（低一格）虎韜／（低一格）軍用／武王問太公曰・・・」と本文が始まり、「六韜巻第四（五、六終）」と尾題でくくる。書式は、無界に毎半葉九行毎行十六字で書す。字面の高さは約二十一糎。全巻一筆で、軟体の、博士家本に見られる字様に類する。料紙は楮紙で墨付き三十二葉。返点・送仮名・縦点・附訓は同時期の薄墨、朱句点・朱引き・朱合点・朱の附訓や校合等も墨筆訓点と同時のもの。巻第五・六の首題の下に「講義三十八・三十九」と書き入れと同筆で加えられている（小字）のは、金・施子美の『施氏七書講義』を参照したことを示すメモであろう。蔵印等なし。

標題徐状元補注蒙求三巻　唐李瀚撰　宋徐子光補注〔近世初〕写　天正二十年（一五九二）奥書　大三冊（091ト307）

唐李瀚の『蒙求』は、大陸では、伝本が多いわけではないが、古く遼代・宋代のテキストが遺るほど読み継がれた啓蒙書であるが、日本でも、平安時代（十二世紀）の写本（長承三年〈一一三四〉奥書本・国宝・文化庁・平成二年汲古書院影印）が遺るほど古くから読み継がれている。古写本の現存は、二十本を超えるほど多い。その種類を大別すると、本文のみもの、「附音増広古注」と題する「古注」を附したもの、更に宋代、徐子光の注を附した「標題徐状元補注」と題するものに分かれる。宋版の伝来とともに徐注本が博士家で詳細に読まれるようになってからは、周密な書き入れが施された古写本も現れた。本書はその室町時代末期の古写本で、完成された浄書本の趣きがある。

江戸時代前期ころの茶色空押唐草菱紋表紙、縦二十八・〇横二十・〇糎。金砂散らし題簽に「元補注蒙求巻上（中・下）」と墨書する。江戸時代前期ころの手か。副葉子が一葉、書き損じ葉一葉、界を設けた本文と同じ紙二葉を添える。続いて序文があり、「註蒙求序（隔七格）趙群李華序／安平李瀚著蒙求一篇・・・」と序一葉。「薦蒙求表／（低三格）光禄大夫行右散騎侍臣徐賢等奉勅撰／臣良言聞建官・・・天宝五年八月一日・・・李良上表良令国子監司業陸善経為表／表未行而良授替事因寝矣」とあり、連接して「易之蒙曰匪我求童蒙童蒙求我此蒙求名書之義・・・咸淳戊辰菊月進士宋秉孫書于桂月精舎」更に連接して、「前言往行載在経史炳若丹青・・・時己酉仲冬之月辛卯」と徐子光の序がある。以上序は四葉。本文巻頭は「標題徐状元補注蒙求上／王戎簡要　裴楷清通（以下注文小字双行）晋書王戎字濬冲・・・」のように始まり、本文は大字で注文は小字双行に書す。尾題は「標題徐状元補注蒙求巻上（巻中終・終）」と題す。ただし、巻中は「新刊」と「標題」の上に加える。書式は、印刷する双辺（縦二一・五横一六・五糎）に有界（これも印刷）で毎半葉八行十七字、界の幅は二糎。版心は双黒魚尾で粗黒口。中縫には何も記さない。全巻一筆

で、返点・送仮名・縦点・附訓（本文には附さず注文のみ）も同筆、朱句点・朱引きも同筆であろう。料紙は楮紙で、上中下巻各冊墨付き五十八葉五十六葉五十七葉である。巻上尾題下に「天正二十年辛午南呂二十八日奉寄／肥前州長寿寺主宰書窓下／筑前州安国山　竹軒子白」、巻中は「天正二十年辛午南呂念八奉寄／肥前州長寿寺主宰書窓下云（云は小字）／安山　竹軒子白」、そして下巻は「天正二十年八月二十八日正当辛午歳龔／奉投贈肥前長寿寺主宰書窓下／筑之安嶠竹軒子六十五歳抛禿筆」と識語がある。本文とは別筆のようである。毎巻の首に「青裳堂」（双辺方形陽刻）の墨小印、毎巻末に「青裳堂蔵本」（無辺緑色）印記がある。

荘子序文　〔室町〕写　　大一冊（091ト224）

本書の書名は、本書が『荘子』のテキスト三種類、即ち晋の郭象・唐の成玄英・宋の林希逸の編纂したテキストに附されたそれぞれの序文のみを集めて一書とした写本であるため、書賈が仮に名付けたものである。今の翻訳書で言えば、前に附された解題であり、漢文古典を講じる際に基礎知識とするべきものを予めまとめておくスタイルの、こうした写本が室町時代の後期にはかなり行われたのであるが、当時はこれを『発題』と称して珍重した。『論語発題』等のように、邦人の編纂に係るもので、足利学校と深い関係にあることは、この写本にしても足利学校系の写本の様式を備えているところから推察することができる。「発題」の語は、古く大陸でも使われ、林希逸の序も「発題」と題されたものであること等、阿部隆一「室町以前邦人撰述論語孟子注釈書（上）」（『斯道文庫論集』第二輯　昭和三十八年）に詳細な考証がある。

『荘子』の現存する古写本は少ない。中国では、宋以前のテキストとして、郭象注に唐陸徳明音義を附したテキス

ト（『続古逸叢書』所収の宋本等）や、宋林希逸の『荘子鬳斎口義』が行われたが、唐成玄英の疏本は失われて佚書となってしまった。日本の中世では、南北朝期に『荘子鬳斎口義』が刊刻されたこと、そして古写本が数点現存するに止まっている。郭象の単注本は高山寺の鎌倉写本のみで、かえって、中国で佚書となった成玄英本『南華真経注疏』の写本を遺しているのが特徴である。『古逸叢書』に所収の宋版・成玄英本『南華真経注疏』（金沢文庫旧蔵本）が日本の中世に存在していたことは、『南華真経注疏』古写本の存在を頷かせるものがある。注疏本は、宋版が十巻本に仕立てるのに対し、古写本は「天下篇」まで毎篇を一巻として三十三に作る。宮内庁書陵部・慶應義塾図書館・史跡足利学校の現存を確認するばかりであるが、いずれも室町時代後期から末期の、足利学校系の写本形式によるものである。

本書は香色渋引表紙、縦二十四・〇横十七・〇糎。題簽は剝落。副葉子が一葉。次葉から「荘子画像銘文曰」「南華真経」「伝灯録跋云」として小字双行で半葉解説を記している。それに続き、郭象の序が始まる。

「南華真経序　（以下小字双行）王弼云南華者・・・／河南郭象字子玄撰　（以下小字双行）皇侃論語疏序云・・・／夫荘子者可謂知本矣　（以下小字双行）天真独朗・・・」この小字の注は宋版等に無いものであって、その由来は不明である。二葉半で「南華真経序終」と尾題。次に「南華真経疏序（隔五格）唐西華法師（隔一格）成玄英撰／夫荘子者所以・・・・重玄之妙旨（以下小字双行）重玄言入重玄門也・・」と二葉半。続いて景徳三年八月五日「荘子」を校讎刊刻する牒文半葉を附す。次に「荘子鬳斎口義発題（隔九格）林希逸／荘子宋人也・・・」と約二葉が続く。尾題に「荘子鬳斎口義発題終」とあり、最後に一葉、「四句本迹」「百非」「右非者」の説明と「荘子」内篇外篇雑篇の篇名を記して本書を終わる。

書式は、単辺有界の墨界を毎半葉九行に設け、毎行二十一字に記す。界内は縦十九・二横十三・九糎、界の幅は一・

六糎。上層四糎を設け、補注を加える。足利学校の書式である。本文は一筆で、薄葉に書写し、本文同筆で返点・送仮名・縦点・附訓を加え、同筆と思われる朱筆の句点・合点・朱引きもある。室町時代後期から末期にかけての書写本で、当時の道家受容を物語る。印記など由来を示すものはない。昭和四十七年購入。

南華真経注疏解経〔三十三〕巻　存内篇巻一～五　晋郭象注　唐成玄英疏〔室町〕写　　大二冊（091ト225）

内篇の「逍遙遊」篇から「徳充符」篇までの零本であるが、数少ない成玄英疏本の古写本。香色の上質紙を後補表紙とする。縦二十四・五横十六・四糎。序文等を欠き、「南華真経注疏解経第一／荘子内篇逍遙遊第一／（低二格）郭象注（以下小字双行注）／（低二格）唐西華法師（隔八格）玄英疏／北冥有魚・・・（小字双行注）」と本文が始まる。上部をやや裁断しているが、書式は足利学校系で、墨界毎半葉九行毎行二十一字に書す。内匡縦十七・五横十三・五糎、界の幅は一・六糎。上層は約四・六糎。薄手の楮紙に全巻一筆で記す。墨の返点・送仮名・縦点・附訓、朱引き・朱句点も同筆であろう。尾題は「荘子内篇逍遙遊第一」等と記す。巻一は十七葉、以下、三十四葉、第二冊は、巻三が七葉、以下二十五葉、十八葉となっている。柱には何も記さない。前書と同じく、室町時代の後期から末期にかけての書写に係り、前書と書写の勢いなどもよく似ている。旧蔵者の由来を示すものはない。

新刊全相二十四孝詩選　附二十四孝詩・二十四孝伝・二十四孝之記・二十四孝　元郭居敬撰〔室町〕写

半一冊（091ト170）

元の郭居敬が舜以下歴代の孝行を二十四集め、詩にしたものであるが、中国では明初刊本（毎半葉十行十字小字十

七字）が国家図書館に蔵されるのみで、他に伝本を聞かない。この北京本は「新刊」と題さないので、或いは本書が基づいたテキストとは別のものであるかも知れない。本書は、上図下文の絵入本として極めて珍しく、精緻に絵を影写している。

全紙総裏打ちを施す。後補茶色表紙、縦二十一・〇横一五・四糎。新補の題簽に「廿四孝詩　完」と墨書する。次に本文共紙の表紙があり、「二十四孝」と墨書する。その見返しに「二十四孝者延平龍溪郭居敬撰」と墨書する。本文は、

新刊全相二十四孝詩選

（低二格）大舜

隊ヒ耕春象（隊-〈タイ〉々春ニ耕象）

紛ヒ耘草禽（紛-々草ヲ耘〈キル〉禽）

嗣堯登宝位（堯ニ嗣デ宝位ニ登ル）

孝感動天心（孝-感天-心ヲ動カス）

と詩があり、低一格で

大舜至孝父頑母嚚弟象傲舜耕於／歴山有象為之耕鳥為之耘其孝感／如此堯聞之妻之二女譲以天下（大舜至-孝　父頑ニ母嚚ニシテ弟ノ象傲レリ　舜歴山ニ耕ハ象アリ　之レガ為メニ耕シ　鳥之ガ為メニ耕□　其ノ孝-感此〔ノ〕如シ　堯之〔ヲ〕聞〔キ〕堯之レニ二女ヲ妻トシ譲ルニ天-下ヲ以テス）」と解説文が続く。そして上欄に舜が耕す図を附す。

書式は、単辺の墨界縦十二・五横十三・五糎、上欄六・一糎（上欄は双辺）、毎半葉十三行十四字、図は毎半葉二図。柱には何も記さない。全て本文墨付き六葉。末に白抜きで「二十四孝終」と尾題を記す。料紙は楮紙。

返点・送仮名・縦点・附訓が墨書されるが、本文同筆、朱引きも同時のものと思われる。この本文の後に、岐陽方秀（一三六一・正平一六～一四二四・応永三十一）などの五山僧による「二十四孝詩」二葉、「二十四孝伝」七葉「〔二十四孝伝〕」五葉、「〔二十四孝詩〕」二葉、「二十四孝」四葉が、室町時代の筆跡でそれぞれ別筆記されている。昭和三十九年購入。

唐賢三体家法三巻　存巻三（五言）〔宋周弼〕編　享禄二年（一五二九）写　宝幢寺旧蔵　　大一冊（B1ト98）

本書は、巻三、五言律詩の部分のみを存す。注を附さず詩本文のみのテキストである。『三体詩』は中国から渡来した元刊本をもとにして、南北朝以来、刊本が流通していたが、かえって写本の現存は少ない。写本は勿論、その刊本の写しであろうが、日光山天海蔵、大東急記念文庫、国立国会図書館、龍門文庫などに零本（完本は国会本のみ）が知られるくらいである。

本文共紙（楮紙）表紙（縦二十六・二横一八・四糎）の左上に「三」右下に「□知」と薄墨で記す。もと三巻揃いであったことがわかる。また、別筆で「宝幢寺　宥俊」と墨書する。「唐賢三体家法詩巻之三」と題し、次行から「（低一格）四実／（低三格）五言躰」として、「（低一格）早春游望（低七格）杜審言／独有・・・」と本文が始まる。尾題は、「唐賢三体家法詩巻之下終」と題する。

書式は、単辺の匡郭を墨書して（縦一九・〇横十四・六糎）、柱には何も記さず、界線もない。毎半葉十一行、毎行十七字。一筆で、訓点書き入れも本文同筆である。返点・送仮名・縦点・附訓を墨書で加え、朱引き、朱圏点を附す。本文墨付き三十九葉。本文第三十九葉が、後表紙となり、その末に「于時享禄二年丁丑五月廿四日書之畢」と本

文同筆で記す。また別筆で「主舜怡」と墨書する。

## 附録〔江戸〕写等

〔蒙求〕存後半（有欠）　唐李瀚撰並注　〔安政六年（一八五九）〕写（海保漁村）　真福寺蔵古写本の影写

一冊（B一ト43）

本書は、真福寺宝生院所蔵の鎌倉時代末期と推定されている古写本の忠実な影写本である。真福寺本は、既に『蒙求古注集成』（池田利夫編　昭和六十三年～平成二年　汲古書院）に影印・解題がある。「季札掛剱」「束哲（ママ）竹簡」まで（徐状元補注本では巻六の45から巻八の54まで）を存し、「束哲竹簡」の注も途切れている。薄葉に敷き写しているが、訓点は全てを写していない。ヲコト点も省略している。朱色空押卍繋表紙、縦二十七・〇、横十九・〇糎。貼り外題に「海保漁村影写古鈔本蒙求」と墨書する。副葉子に「荻野蔵」（双辺長方陽刻）と朱印記あり。本文は、「季札掛剱　徐穉置芻　同」と題あり、「説苑呉季札使隣国北過徐君・・・」と小字で注を記す。墨付き三十三葉。毎半葉十一～十二行で、毎行十七字内外、字面高さ約二十・〇糎。末の一葉に海保漁村（松崎慊堂門、考証学者一七九七～一八六六）の跋が二則附されている。

右真本旧注蒙求零巻自季札掛剱至束哲竹簡注装／為一冊世所伝古鈔本旧注及活字旧注本者率分為三巻滕公／佳城至伯瑜泣杖為中巻陳逵豪爽以後為下巻而是本則相／接連不分巻考李華序称李翰著蒙求一篇知其原本／固為一巻也無仏斎好古日録載蒙求一巻称貞和以前／本又一本為七百年以上物云其注与諸本不合据此是本原／帙蓋即貞和以前本殆係従巻子本影鈔其書一例以行草／相雑厠其字様与巻子本玉篇略同知得之唐人旧帙世所／伝旧注諸本比之蔑如也雖所存不多而

亦極足以可貴重云／己未孟冬廿有八日漁村老人書
又按此本毎節二句下往々注忠臣孝子正真清廉等字愚嘗／閲五条菅氏所蔵蒙求巻子本亦有此標記掲之上方蓋即／所謂標題者矣是日又記
即ち安政六年（一八五九）漁村六十二歳の跋である。海保漁村については、『海保漁村先生年譜』（漁村先生記念会昭和十三年）を参照。

遊仙窟　唐張鷟（文成）撰　闕名者注　〔江戸〕写　今出川家旧蔵　一冊（091ト120）
栗皮表紙。縦二十七・八横二〇・三糎。副葉子・序文などは無く、すぐに本文が始まる。「遊仙窟（隔二格）寧州属開内道・・西北也〈属以下十三字は小字双行〉襄楽県尉張文成作若夫積石山者・・」と題・作者・本文と連接する（内題の「仙」字は、「遷」に人偏を加えた字に作っている）。書式は、薄手の楮紙に無辺無界で、毎半葉八行十五字、注文は小字双行に書す。字面の高さは約二十・五糎。本文のみに返点・送仮名・縦点・附訓を附す。少々朱引きがある。本文・訓点全部一筆である。尾題は「遊仙窟」と。本文墨付き六十四葉。別に末一葉、「文保三年（一三一九）四月十四日授申圓禅序畢　文章生英房」の跋文がある（本文同筆）。
『遊仙窟』の諸本について、並びに本書の詳細な研究は、「遊仙窟の諸本につきて」（林望　『東横国文学』第十三号昭和五十六年）を参照。それによれば、本書は本文が陽明文庫本系統の属し、訓点は醍醐寺本系統に属するとされる。また、『遊仙窟』の解題翻訳は『遊仙窟全講』（矢木沢元　明治書院　昭和四十二年）を参照。
首に「今出／川／蔵書」（方型陽刻大）「岡田真／之蔵書」（双郭長方陽刻）の印記がある。昭和五十四年購入。

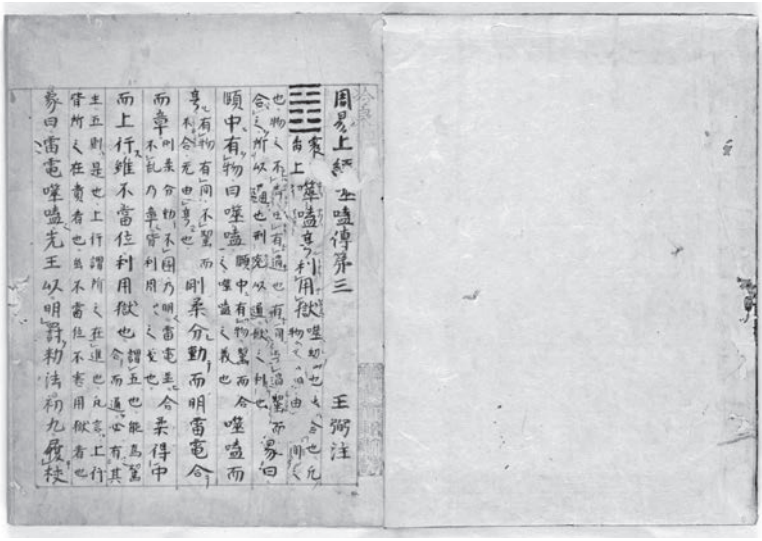


図１, 周易　091ト210

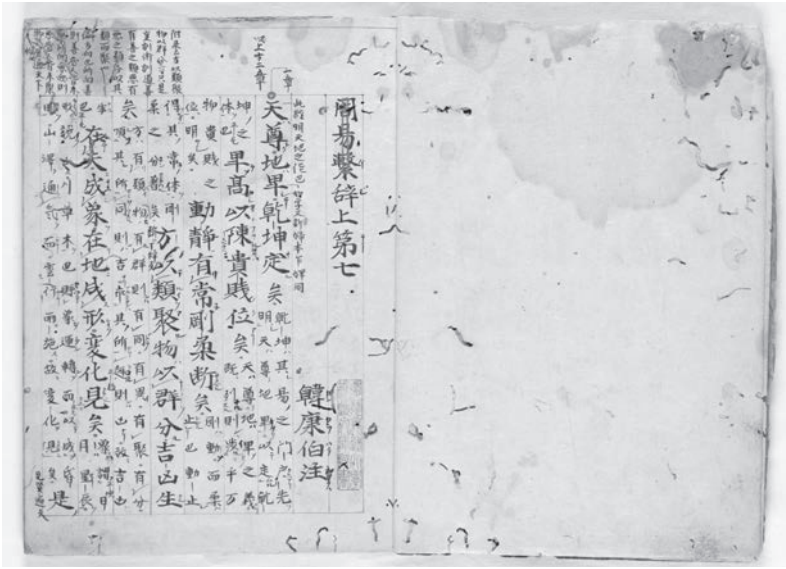


図２, 周易　091ト221

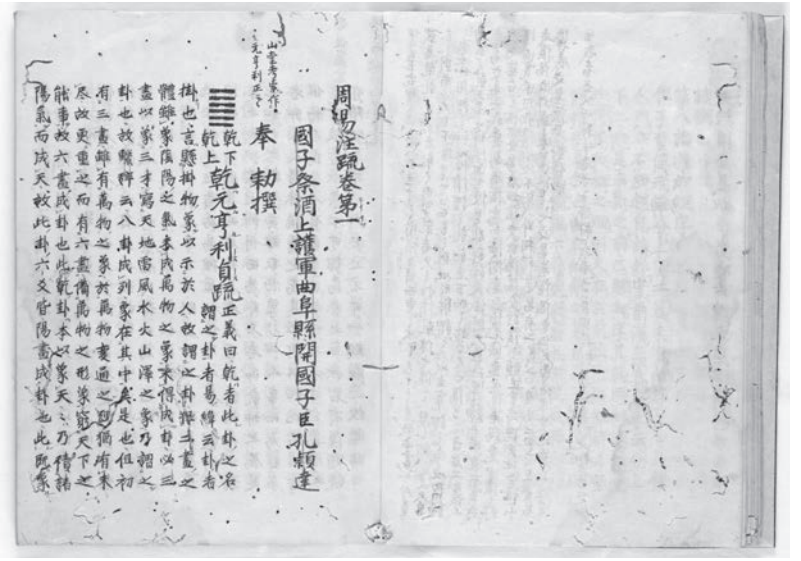



図３, 周易注疏　091ト223

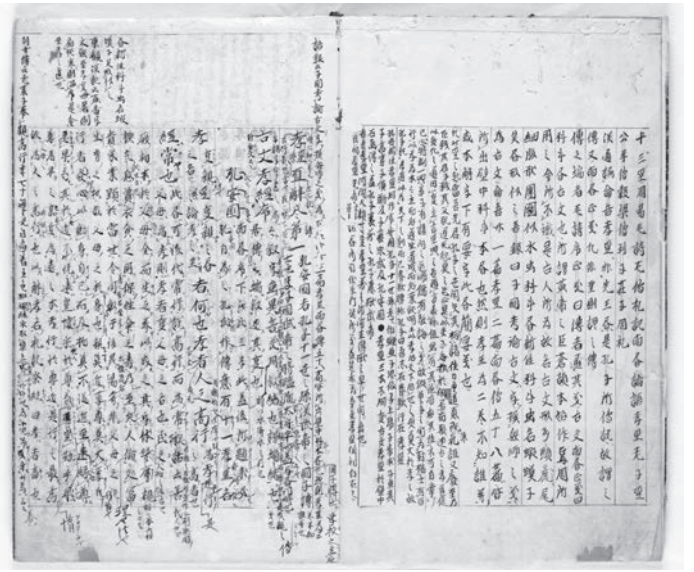



図４, 孝経直解　091ト158

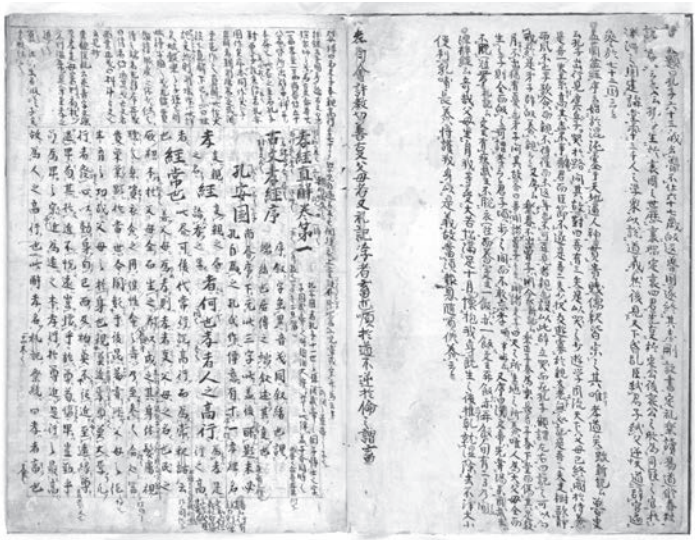


図５, 孝経直解　091ト159

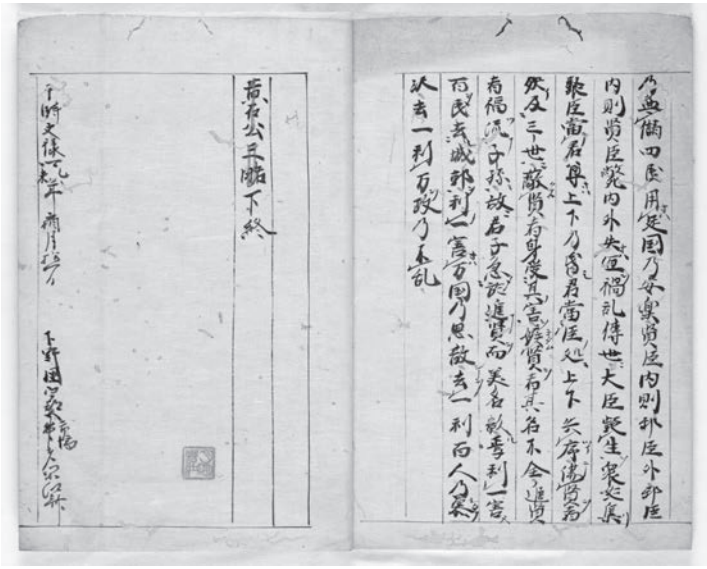
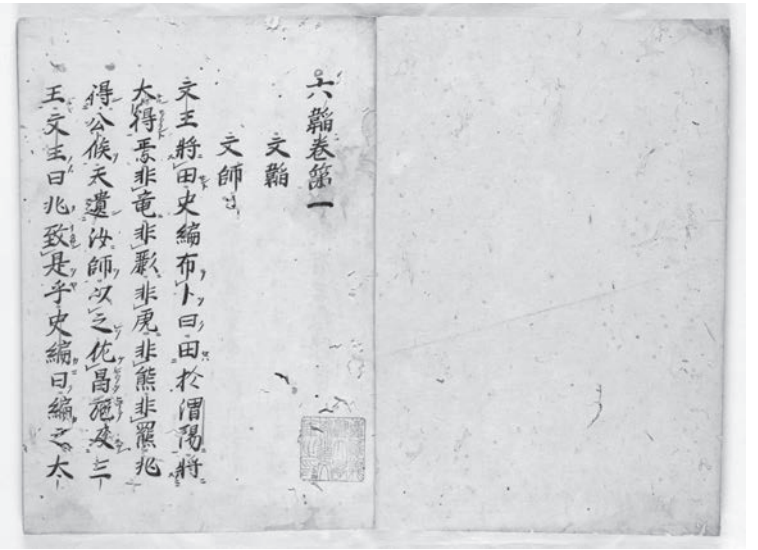
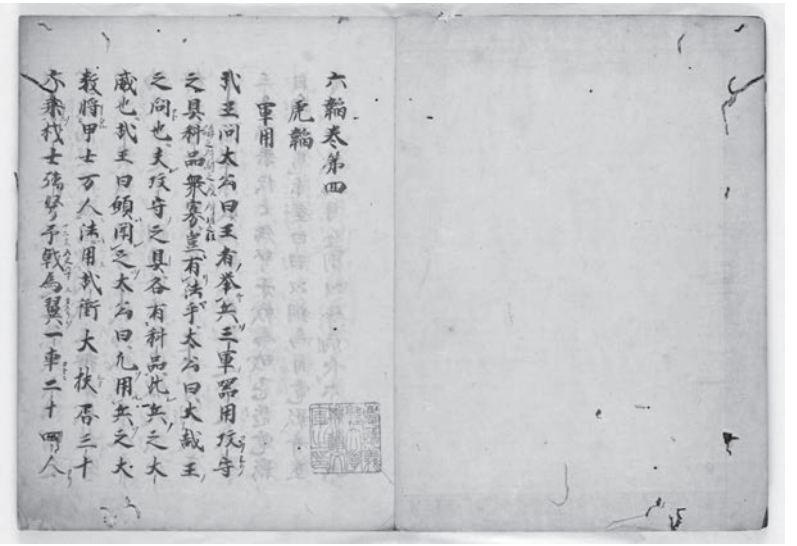


図６, 黄石公三略　091ト149



六韜卷第一
文韜
文師
文王將田史編布卜曰田於渭陽將
大得焉非竜非彲非虎非熊非羆兆
得公侯天遺汝師以之佐昌施及三
王文王曰兆致是乎史編曰編之太

図7，六韜　091ト152



六韜卷第四
虎韜
軍用
武王問太公曰王者舉兵三軍器用攻守
之具科品衆寡豈有法乎太公曰大哉王
之問也夫攻守之具各有科品此兵之大
威也武王曰願聞之太公曰凡用兵之大
教將甲士万人法用武衝大扶吾三十
六乘杖士強弩予戟為翼一車二十四人

図8，六韜　091ト280

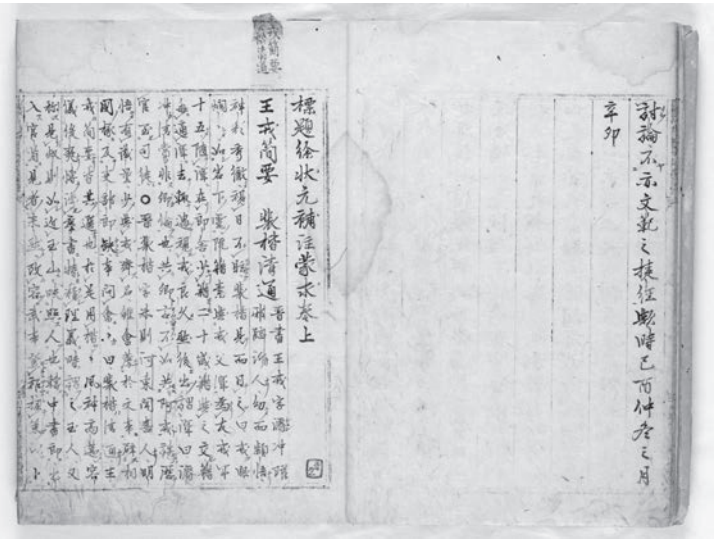


図９, 標題徐状元補注蒙求　091ト307

図１０, 荘子序文　091ト224

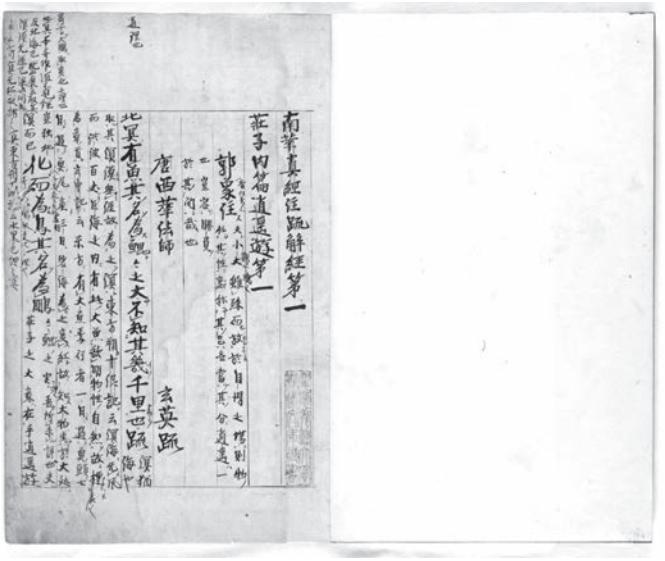


図１１, 南華真経注疏解経　091ト225

図１２, 新刊全相二十四孝詩選　091ト170

図１２, 新刊全相二十四孝詩選　091ト170

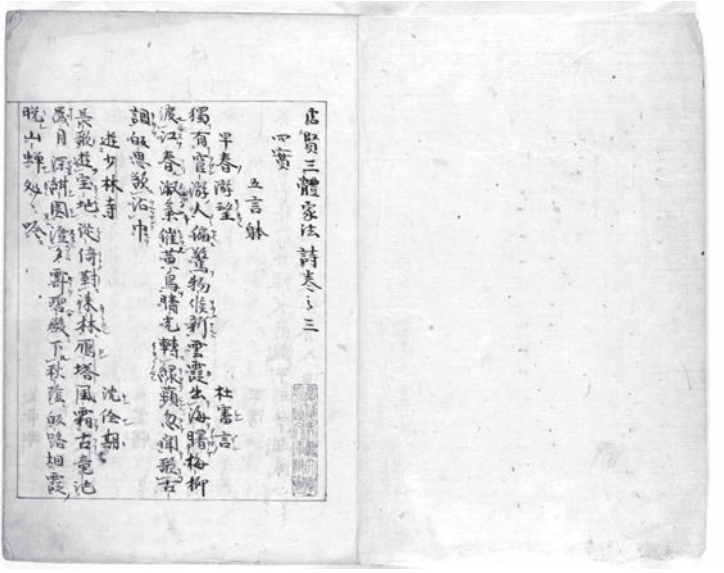


図１３, 唐賢三体家法　B1ト98

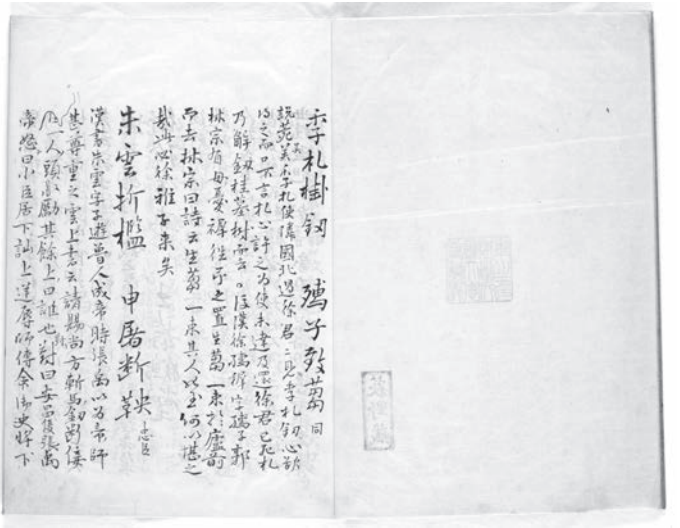


図１４，蒙求　B1ト43

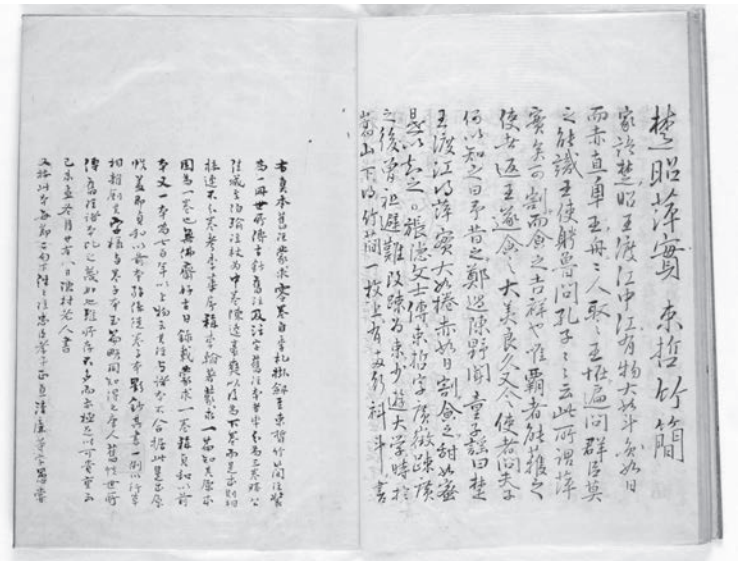
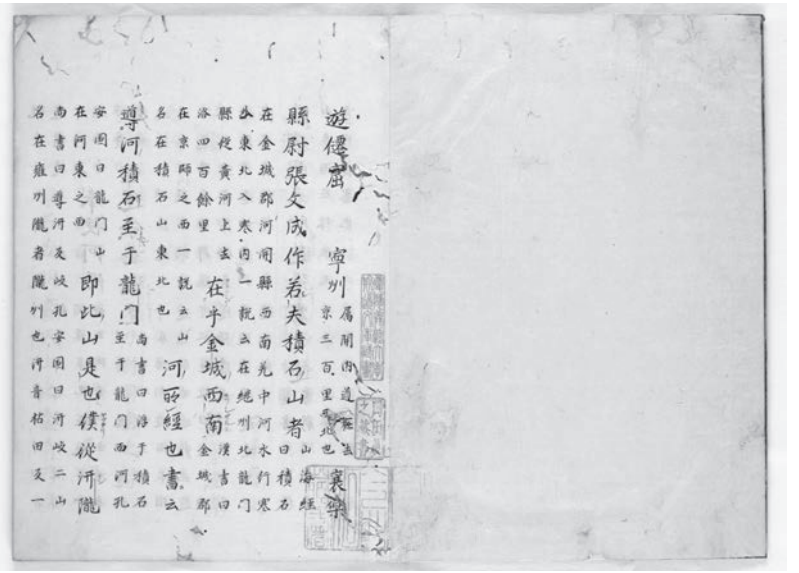


図１４，蒙求　B1ト43



遊僊窟　寧州屬開內道在去京三百里西北也　襄樂縣尉張文成作若夫積石山者山海經曰積石在金城郡河間縣西南羌中河水行寒水東北入寒內一說云在絕州北龍門縣從黃河上去洛四百餘里在乎金城西南漢書曰金城郡在京師之西一說云山名在積石山東北也河所經也書云導河積石至于龍門尚書曰浮于積石至于龍門西河孔安國曰龍門山在河東之西即此山是也僕從汧隴尚書曰導汧及岐孔安國曰汧岐二山名在雍州隴者隴州也汧音枯田反一

図１５,遊仙窟　091ト120